



同窓会

見方 歩

プロローグ

プロローグ

一通の葉書が来た。それは十年前にも見た物だったが、その時は実現せず、実に二十年振りになる。

葉書の内容は、中学の同窓会のお知らせだった。十年前の時は、二日前になって当時担任だった先生が交通事故で急死した。出席するはずの先生の急死に同窓会は中止となり、何人かは先生の葬儀に参列していた。

私はそこまで先生と親しい訳ではなかったし、夫の浩介も別にいいだろうと言っていたから、先生の葬儀には行かなかった。

夫の浩介とはその中学の同級生である。もちろん一緒に同窓会に呼ばれている。今年三十五歳になり、子どもも二人いる。上のお姉ちゃんは中学三年生で、下の妹は小学六年生だ。

久々に見る同級生の名前に当時を思い出す。もう娘の年なのかと改めて時が経つを感じる。

中学生だった当時、二人は付き合っただけではなかった。それどころか滅多に話をする事もなく、そんな二人が何故結婚したかと言うと、中学の時に一つ過ちを犯したからだ。しかし、中学生だった二人は特に気が付かなかったのかもしれない。

二人が再び出逢ったのは、社会人になってからだ。だから中学からそこまでの間は、ぼっかりと空いている。お互い別々の高校へ進み、何一つ共通の事もなく、そして出逢うまで、その存在すら忘れていた。

出逢ったのは、社会人一年目。まだ運転免許も取りたてで、若葉マークも目立つ新米ドライバーだった頃、私は車のハンドルを切り損ねて、道路脇の側溝にタイヤを落としてしまった。たまたま偶然通りかかったのが

今の夫の浩介だった。

浩介は、私の事には気付かず、手助けしようと車を止めた。中学の頃とは違い、背も伸びて、体格も大きくなり逞しい男になっていた。もちろん私も女らしくなっていたし、中学の時とは違っていたけど。

「大丈夫？」

この一言で私は浩介だと分かった。

「うん、落としちゃって」

探るように声を出しながら、様子を窺ってみたけど、浩介は私の事には気付かないみたいだった。

「あー、前輪だけか」

車に向いたまま独り言のように言い放ち、下の方を覗き込んで状況を見ている。

「大丈夫だ、引っ張り上げてやるよ」

浩介の車は厳つい四輪駆動車で、何やらワイヤーみたいなものを出して、手際よく準備する。私は浩介の指示通りに車のハンドルを握った。

「じゃあ、引くよ」

言うと同時に、車はいとも簡単に道路に戻った。一人せっせとワイヤーを片づける浩介にお礼を言った。

「あれ、里村、里村奈緒美？」

浩介が私に気付いた。すごく驚いたように、話しかけてきた。

「全然わからなかったよ、何だよ言ってくればいいのか」

これがきっかけで、時折話をするようになり、私達は会うようになった。とは言っても、男と女の恋仲ではなく、浩介が夢中になっているサーフィン仲間に、私も混ぜてもらった。この厳つい四輪駆動車も砂浜に入るために買ったそうだ。

何時も一緒にサーフィンしているのがごく自然なことになり、浩介と海にいる事に居心地の良さを感じていた。

心地よい風に頬を撫ぜられる浜辺で、さざ波の音に身を任せ、砂浜に投げ出された体は陽に焼けている。歓喜の声が何処からともなく聞こえてくるが、波打つ音に混ざり、それさえもまるで静寂の中の無音に感じるほど、耳には自然に響く。ボードを持って海から上がってくる浩介を眺めていた。

ふとした不注意で、私はコンタクトレンズを砂浜に落としてしまった。何やってんだよと、声は訝しがっているが、浩介は四つん這いになって探している。垂れ下がる髪を掻き上げながら、私も両膝をつく。

「あった！」

ほとんど二人同時だったと思う。四つん這いのまま二人は頭突きしたように頭がぶつかった。

「痛っ」

浩介の記憶 1

「いてーよ」

これが、中学の時の記憶を蘇らせた。そう、あの資料。あれはホームルームで使う資料を、二人で職員室へ取りに行った時の事だった。当番だった俺達は、何を話す訳でもなく、無言で廊下を歩く。二人で歩いているだけで恥ずかしいのに、まあ中学の頃には、そんな初な心があったのだ。

職員室に入ると、先生は待ち構えていたかのように資料を出してきた。

「じゃあ、これとこれ二種類あるから」

一人一種類ずつ持たされた。落とさないようにと職員室を出ようとした時、先生が気付いた。

「あー、ゴメン忘れてた」

先生は、机の上やら、抽斗やら探し始めた。見つからないうちに始業のチャイムが鳴った。

「先生、これじゃないですか」

俺は、先生の机の下に落ちているプリントを見つけて言った。

「ゴメン、これも」

先生は俺の資料の上にさらに載せた。俺は背が小さい方だったから、ちょっと前が見えづらくなった。でも、奈緒美も自分の分しか持てなかったから、そのままそろりそろりと廊下を歩いた。

廊下にいた生徒は皆教室に戻り、今は廊下に誰もいない。

「早く行かなきゃ」

奈緒美は俺をせかした。廊下を速足で歩き、そのまま階段へ。踊り場を回り一步上ろうとした所で俺は躓き、手に持っていたはずの重さが宙に浮く。紙の散らばる音を伴い見事なまでに資料は散乱し、まるで芸人がわざとやったみたいによろめいた。

「もう、なにやってんのよ」

文句を言いながらも、奈緒美と一緒に拾い集めてくれた。一枚一枚、しゃがんで蛙のように一步進んでは拾い、また一步進んでは拾い。拾い集める出した手が同じプリントだった。ふとあげた顔、向こうも同じだったのだろう。それは偶然だったのだが、口と口が重なった。あまりに無防備な出来事に二人は何をすることもできず、それが一秒だったのか一瞬なのかは覚えてはいないけど、少し時間を感じた。初めてのキス。向こうも同じファーストキス。その感覚はしっかりと脳裏に焼き付けられた。

はっと離れて、お互いの顔を見た。でも奈緒美は何も言わず、すぐまた拾い集めた。俺もそれを見て、また拾い集めた。

ようやくのことで拾い集め終わると、紙の上下左右を整え俺の両腕にドサッと載せた。何でもない表情をしてはいるけど、心の中では動揺していると感じた。

「行こう」

ぐるりと立ち上がる奈緒美に、俺は無言でついて行った。奈緒美はその後、その事には何も言わなかった。そう、砂浜で頭をぶつけるまで記憶の彼方へ、どこかに行ってしまった。

砂浜の上で頭を押さえ、しゃがみ込む二人は、お互いのファーストキスを思い出した。しばらくお互いの顔を見ていたが、惹かれ合うようにキスをした。その瞬間あの過ちは、過ちではなくなった。どう決着をつけていいか分からなかったファーストキスが、三年以上も経った今、目の前の瞬間の伏線となって意味を持ち蘇る。

「あーあ、コンタクト何処かへ行ってしまったじゃない」

中学の時の過ち、それが俺達の一步となった。

奈緒美の記憶 1

私達はそれから結婚するまでよく一緒にサーフィンを楽しんだ。浩介の車はもう半分私の物だった。車の後ろ半分には、二人分のサーフィンボードと、ウエットスーツが積んである。浩介はそんな車に乗って毎日会社へ行くのだ。そして休みになると、私を迎えに来てくれる。

中学の時は同じくらいだった背も、今は頭一つ違う。胸板なんかもすっかり男らしくなって、これが同じ浩介だなんて、知っている私には信じられないくらいだった。別に中学の時の浩介がヘタレかと言うと、そうではないのだけれど、男だと惹かれるものは無かったと思う。

今日も、朝から二人でサーフィンをしている。浩介は始めてから二年だと言っていたけど、仲間内でもかなり上手い方だった。そんな浩介に、何時しか私は惹かれていたんだろうな。私のサーフィンはと言うと、浩介に手とり足とり変なところまで触られて、どんどん上手くなった。まあ、素人レベルの話だけど。でも、それなりに波に乗ることもできるようになった。

今から、二人で同じ波に乗る。この同じ波に乗る時が最高に楽しい。水が生き物のように私達を乗せ、海上の空へと運ぶ。馬に乗った事は無いけども、何か水と言う生き物に乗っているみたいで、海と繋がっている感じがした。

ちらりと横目で、浩介が私を確認したのが分かった。波のチューブの先端が空を丸く切り取って私達を誘う。浩介が空に吸い込まれていくと、波が光のクリスタルとなり、七つの色を放ちながら頭の上を過ぎて行く。

最後の最後に波にのまれた。浩介が向こうで大笑いしている。私は思いつきりの笑顔で、悔しい～って叫んでやった。

海水で濡れた髪の水を切って、浜辺に座り込む。隣に座った浩介が、そっと褒めてくれた。「いいんじゃない。上手く捌いてたよ」

サーフィンと海と浩介。結婚するまでは、もうそれだけで満足だった。そして二十歳で結婚。来てくれた友人は、なんで一とか、何時から～とか、褒めてくれるより、意外みたいな感想ばかり言われた。そりゃ私だって意外だったんだもん。でも今は誰よりも一番好きなんだし、その浩介は浩介で、友達にからかわれていた。浩介の友人は私の同級生でもあったから、一言言ってやった。

「私で、悪かったわね」

まあ、祝福しに来てくれたのだから、冗談でちょっと皮肉ってやっただけなんだけど。

新婚旅行はと言うと、当然お金なんて持っていなかったから、浩介の車で海を求めて走り回った。有名な波が来ると言う海へ、海から海へと一週間かけて走り回った。だから新婚旅行の写真と、普段の写真の違いは、後ろの海が何処の海かって言うことだけだった。

あれから十五年か、私は子供が出来てから、だんだんとサーフィンから遠ざかって行った。海に行っても何時しか普通のお母さんになっていた。浩介もここ数年は出世したせいもあって、前のようにサーフィンには行ってはいない。たまに忘れたように、家に置きっぱなしになってい

る時もある。私はそんな置きっぱなしのサーフィンボードを見て、海を思い出したりしていた。

そして今日、二度目の同窓会の葉書もらった。もう二十年経っている。皆どんな顔をしているのだろう。そうそう、家にも一人同級生がいたんだっけ。皆変わっているんだろうな。何か想像していると、楽しみになってきた。浩介が帰ってきてから、葉書を見せた。

「へえー、二十年振りか」

そこへ中学三年の長女が割り込んできた。

「え～、何、中学の同窓会？あれ、お父さんとお母さんの、同じじゃない」

娘は、私達が中学の同級生だと言うこと知らない。別に隠していた訳じゃないけど、たまたま今、娘が気付いた。

「え～、お父さんとお母さんて、中学から付き合ってるの？」

娘ももう中学三年だ。恋の一つや二つ知っているのだろう。自分と同じ年の親に、興味があって訊いているのだと思う。

「ねえ～、どんな感じだったの。その頃からラブラブ？」

娘の想像とは程遠い現実を言いかねて、言葉を濁した。

「もう、忘れたわよ」

「私のクラスにもさ～、同級生で付き合っている人がいるんだけど、お父さんとお母さんみたいに結婚しちゃったりして」

「知らないわよ、人の事は」

そしてここに書かれてあった日、娘二人は妹夫婦の所へ行ってもらうことにした。妹夫婦には小学五年の女の子がいる。まあ、仲良く遊んでくれるだろうと、娘二人にはそう伝えた。

「何着て行こうかな～」

「普通でいいんじゃないの」

「え～、せっかくなんだし...」

若かった頃と張り合いの違う夫に口をとがらせ、こんな時ぐらいいいじゃないかと、念を送る。テレビを見ている浩介に、アツカンペーをしてやった。

浩介の記憶2

そして今日、俺たちは同窓会に行く。たぶん二次会三次会があるだろうから、奈緒美の妹夫婦には、一晚娘を預かってもらった。奈緒美も久しぶりに 羽を伸ばすぞ～と、大きく背伸びをしていた。

「なんだよそれ、買ったの？」

「いいじゃない、たまには。今日久しぶりに会うんだし」

奈緒美は結局新しい服を買って、今日は何時よりもお洒落をしていた。

「長谷川に未練あんじゃねえの」

長谷川雅人、中学の時、奈緒美が片思いしていた相手だ。その話は結婚してから聞いたのだ

けど。

「何言ってるの、もう二十年前よ、そんなの忘れたわよ。そっちこそ、高見真紀ちゃん目当てなんじゃないの」

同級生だった俺達には、二十年前も今も同時に進行している。他の奴らはどうなんだろう。皆に会うのが楽しみになってきた。会場はホテルの小ホールを貸し切ったバイキング形式で、立食パーティだった。受付にいた同級生に、まず俺が吉岡浩介なのに驚かれ、さらに里村奈緒美と結婚している事に二度驚かれ、何時の間にかその辺に集まっていた者の話題の種になっていた。

「おい、里村と結婚したんだって」

同級生が結婚するというのは、からかいやすいらしい。別に悪気もないのだろうけど、中学の時のままの口調で皆口々に思ったことを適当に言っている。

「何時からだよ、まさか中学の時からか？」

皆の思いは二十年も前の教室。すっかり歳をとった顔をしているくせに、喋っている事は中学の時、そのままだ。奈緒美は、もう女子の中に溶けて行って、何処へ行ったのか分からない。まあ楽しくやってんだらうと、俺は男の群れの中に居る事にした。

あいつが来るとか来ないとか、なんとかが海外に行っているなんて、昨日までがどうでもよかった事が、今一番知りたい情報だった。当時、クラス委員をしていた清田が、俺らの前で足を止めた。

「やー、皆よく来てくれたな」

学級委員の顔のままで二十年歳をとっていた。老けてはいても眼鏡を人差し指で上げる仕草は当時のままで、今回の同窓会の幹事をしている。

「えー、吉岡？」

はいはい、もう慣れました。会う人会う人、皆第一声がそれだから。清田は後十分で始めるからと言って、中へ入って行った。

あれは、俺が見つけたのは、高見真紀。実は俺の片思いの相手。ずーっと片思いで告白する事も無く、中学を卒業してから初めて会う。ちょっと太ったな。つい奈緒美と比べてしまう。奈緒美は今でこそサーフィンをしてはいないけど、その頃は腹筋が割れるくらい体が締まっていた。まあ、今はそれほどではないけど、今日ここにいるどの同級生の女子よりもスタイルは良かった。何か得意気に同級生だった女子の体の線を眺めると、皆貫禄が出てきたというか、変わったな～とってしまう。

「おいおい、吉岡。里村が睨んでいるぞ」

あー、こういう時は目ざといのね。でも俺の嫁の方が皆より断然スタイルがよさそう。後性格もね。付け加えるように思い浮かべ、妻の奈緒美にアイコンタクトを送った。分かったのかどうかは分からないけど、また女達の中に消えていった。

「でもなー、里村となー」

もう聞きました。ここに来てからそればっかだっうの。

「おーい、中に入れ」

清田の声と共に、皆ぞろぞろと中へ入った。小ホールに三十人は丁度よく、皆の顔を見渡せた。明らかに禿げ上がった奴、どう見ても四十代のオッサン。何とも皆変わったものだとぐるりと

見渡す。

「えー、では最初に乾杯したいと思います」

清田の乾杯で、一斉に飲みだした。男どもは八岐大蛇の如く酒に群がる。

「一杯どうだ」

声の方に振り向くと、岡島がいた。きりっとしたセールスマンのように立っていた。飲めよと出されたビールを受ける。俺も酒の味が分かるようになってからの方が、中学までより長くなったと思った時。えっ、いや間違いない。此処は教室だ。それも3年D組。並ぶ顔はどれも知っている顔だ。あっ、奈緒美もいる。何真剣に勉強してんだよ。奈緒美の後ろ姿に思いを巡らしていると、黒板を書きなぐる音に気が付いた。えっ、山ボン？それは数学の教師に付けた徒名だけど、黒板を走るチョークの音に鮮明に思い出した。相変わらず汚ねえな。何が書いてあるのか分かりやしない。でも何でここにいるんだ？

俺は、後ろの席にいる岡島に声をかけた。そう言えばこうやって後ろを向いて叱られたっけ。中学の記憶を辿り、岡島に声をかけた。

「なんだよ」

自分の方に顔を向けた岡島は、グラスを片手にチキンを食べていた。あれ、教室は？でも同窓会だよな。気を取り直して、岡島と昔話をした。

奈緒美の記憶 2

「ねえ、吉岡君って男らしくなったよね」

今日はこの話題ばかり。そりゃ中学の時は背も大きくなかったし、目立たなかったけど、今は頼れるいいお父さんなんだから。そう心の中で思い、同級生の女子たちとお喋りする。

「えー、でも何時からなの？」

んー、この話、もういいかな。会う人会う人説明してたら、それだけで疲れちゃうよ。

「そう言えば、長谷川君。あそこにいるんじゃない」

長谷川雅人、私が中学の時好きだった男子。仲の良かった女子は、その事を知っている。だから覚えていて、からかい半分に教えてくれた。

「何処にいる」

とりあえず興味の眼差しで、長谷川雅人を探す。

「ほら、あそこ」

指さす方を見て見つけた。えっ、あれ、あんなんだっけ？ちょっとがっかりした。何かおじさんって言うか、同い歳とは思えなかった。

「えー、幻滅」

皆とあだこうだと、人の事を観察しては話の種にした。女が寄れば、自然と子供の話になる。どうやら皆だいたい小学三年生くらいが多かった。私の娘が筆頭のように、皆からウソーと大声で驚きの眼差しをもらった。

「見えない。中学三年の子供がいるなんて」

皆は口々に私のスタイルを褒めてくれた。これもずーっとサーフィンにハマってたお陰なんだ

けど。

「でも、何かしているんでしょ」

羨ましそうに視線を送る塚田さんは、もう中年太りのようだった。

「奈緒美飲めるんでしょ」

明るい声で寄ってきたのは、かえちゃん。確か結婚して都会の方に行っているって聞いたと思ったけど。

「よく来れたねー」

「うーん、それがバツイチになっちゃってさー、今ね実家にいるんだ」

そうなのかと、周りからもそんな話がちらほらと聞こえてきた。中には再婚した人もいるって。

「まあ今日は久々だし、飲もうよ」

かえちゃんは私にビールを注いでくれた。

「んー、美味しい」

遠慮なしに飲めるのは久々だ。何時も子供がいるから、こんな風には飲んだ事がない。

あれ、ここはグラウンド？えっ、校舎？ってここ中学じゃない。なんでこんなところに居んのよ。私は体操服を着て100メートル走の順番を待っていた。私の前の列にかえちゃんがいた。スタートの声で、かえちゃんは走って行った。走るのが嫌いなかえちゃんは、一生懸命手を振り走って行った。

「はい、次」

スタートの声で私は走り出した。何故か私は走っている。とにかく100メートル全力で走った。ゴールした先に、かえちゃんが座っている。私はかえちゃんに声をかけた。

「大丈夫だった」

「うん、大丈夫。子供とも仲良くやっているしね」

えっ、てここ同窓会じゃん、私はかえちゃんとバツイチの話をしていたんだっけ。で、子供がいるって。そうそうと話を整理して、かえちゃんにビールを注いだ。

「頑張っているんだね」

100メートル走のゴールの先は、どうなっていたんだっけ。思い出せないままビールを傾けた。

浩介の記憶 3

どうもさっきから変なんだよなー、会う奴会う奴何故か中学の時に戻るんだよな。もしこいつもあの時に戻ったらどうしよう。あの時の事を覚えているかな。いや、こいつと話すのはよそう。

顔を合わせぬように向き直ろうとした時、声をかけられた。

「よー、吉岡」

ありゃ、見つかった。俺の予想は的中した。まさにあの時の、あの部屋だ。

「これ見ろよ、すげーんだぜ」

遠藤が見せてくれたのは、無修正のエロ本だった。まだ女の体を知らなかった俺は、その本にくぎ付けになった。遠藤は満面の笑みで鼻の穴を大きくし、所有している優越感と、性的興奮が入れ混じり、手に入れるまでの苦労話を語り始めた。俺は、女の体に気が昂り、貸してくれと頼んだ。洩る遠藤を拝み倒して、何とか一日だけ借りる事が出来た。ところが俺は、返さなかった。と言うより返せなかった。学校から帰ってくると、母ちゃんに呼ばれた。

「なんだい、あの如何わしい本は」

怒られて、そのうえ母ちゃんは捨てたと言った。俺はどうしようと思ったけど、なかなか言い出せなくて、ズルズルと長引かせていた。そして何時の間にか、うやむやになるのを忘れて忘れた。

しかしその本は今、間の前にある。広げると金髪の女性のあらぬ場所が、ハッキリと写っている。遠藤は俺の顔色を窺うように眺めてから、得意げに言った。

「貸してやろうか、一日百円」

中学生だった俺は、この本が見たくて見たくてたまらなかった。そして今、指を滑らせるように頁を送り中学生だった自分を思う。ガキだな～。

「いや、いいよ。遠藤に悪いし、無くしたら大変だしな」

ほい、と遠藤に手渡した。

「なんだいいのかよ」

向き合っている遠藤が、目の前でビールを注ごうとしていた。

「おー、すまん。悪いな」

また同窓会の席にいて、周りを見渡した。いったいどうなっているんだ。不思議な感覚に惑わされていた。

奈緒美の記憶3

あれー、まただ。どうなっているの？確かにここは中学だけど、なんで私ここにいるんだろう。あっ、そうそう三井さん、加藤君の事が好きで私相談されたんだ。でも振られちゃうんだよね。なんで今さらこの事を思い出さなければいけないのよ、ってこのシーンは三井さんが告白するところじゃん。そう私は三井さんに付き添って、加藤君に告白しに来たんだ。

私は後ろの蔭からそっと見ていたんだけど、それがなんで今なのよ。この後、私はあの一言を聞くんた。ん～、どうしよう。この後、気まずくなっただよね。

「加藤君...好きです」

あーあ、言っちゃったよ。当然私はこの後の結末を知っている。だって、二十年前に見たんだもん、この場所で。

「ごめん、好きな人がいるんだ」

この後なんだよな。今さらだけど、純情な告白っていいもんだね。制服の三井さんの後ろ姿を見ていたら、その一言が声となって私に届いた。

「俺、里村が好きなんだ」

それって私なんだよね。まあ、加藤君はそれなりにカッコ良かったけど、その時私は長谷川君に夢中だったからなー。でも今思えば、加藤君もカッコ良かったかな。あっ、この後ここで見ているのがばれるんだっけ。えっ、でも気付かないじゃん。どうしよう、おっかしいな。ちょっと

違う展開になってきたんじゃない。ここは出て行った方がいいのかな。あれれ、帰っちゃうよ。これは、まずいのかな。まさか結末が変わったりなんてしないよね。私はそっと紀子に近づいた。後ろから見てても泣いているのが分かった。

「紀子...」

振られた相手が好きだと言う女の子には、慰めてはもらいたくはないだろう。でもあの時、ちゃんとその話をしなかったから、紀子とは仲直りができなかったんだ。

「大丈夫...」

目の前にいる紀子は中学三年生だ。私の娘と同じ年の女の子だ。どう接したらいいのか分からぬまま、声をかけた。

「しょうがないじゃない」

しまった。結果を知っているからこんなことが言えるんだ。うつむく顔を覗き込むと、中学三年生の顔があった。私は母のように、そっと頭を寄せて声をかけた。実際には三十五歳ですから。

「奈緒美、私振られちゃった」

細々と声を出しながら涙をこぼす紀子は、娘のようだった。

「加藤君ね...紀子の事が好きなんだって」

知ってますよ。でもここは驚いておかないと。

「えっ、ほんと？」

「奈緒美、私達誰が好きでも友達だよ」

「...うん」

こんなこと言ったっけ？

「私振られちゃったけど...奈緒美、もしその気があるのなら、加藤君と...付き合ってくれない」

はあ〜、何言ってんのよ。あんた、その話で私と仲悪くなったんじゃない。どうしよう、断っていいのかな。迷っているところへ、加藤君が来た。なんであんたまで登場すんのよ。睨み見た加藤君の顔は、どういう訳かカッコ良かった。ウソ、こんなにカッコ良かったっけ。加藤君は私の方を見ながら言った。

「奈緒美、俺向こうに混ざってくるわ」

「えっ、うん...」

ってここ同窓会じゃない。それになんであんたに奈緒美呼ばわりされなきゃいけないのよ。

「でもさー、奈緒美が加藤君と付き合っていたのは知っているけど、まさか結婚しているとはね」

何、結婚？加藤君と？ちょっと紀子何言ってんの、私の夫はあっちだってば。ほらあそこにいるあれ、誰だっけ...

「奈緒美〜久しぶり」

そこに飛び込んできたのは、高見真紀。そうだ、私の夫の浩介の片思いの相手だ。

「皆、まさかって盛り上がっているよ」

「へっ、なんで」

「何言ってんの、中学から付き合ってた結婚まで行くなんてすごい事じゃない」

どうやら私は加藤君の妻になっているらしい。なんで、どうしよう。私、加藤君の事なんて何も知らないし。

浩介の記憶4

何かある。今日の同窓会、絶対何かある。大体いきなり中学生になるなんて現実におかしいだろう。俺だけなんだろう。他の奴らは普通なんだろう。窺うようにして眺めてみても、普通の立食パーティがあるだけだった。

奈緒美は？思いついたように辺りを見渡してみても、何やら笑いながら話し込む姿を見つけた。別に普通のようにだけど、でも錯覚なんかじゃない。よく整理していくと、中学の時、何もなかった奴は一言ぐらいですぐ現実に戻ってこれる。でも何かあった奴は、その時のまま、またそれを体験する。

じゃあ、特に何もなかった清田なら話しかけても、すぐに戻ってこられるはず。それとは逆に前川だったら、あの時に戻るのだろうか。よし、清田に話しかけてみるか。

「清田、同窓会ご苦労だな」

「いや前回作った名簿で、そのまま送ったんだけど何人か変わったみたいで本当なら四十二人なのにな」

「でも、三十人も来ているんだから、清田のおかげだよ」

「そうでもないさ」

目の前で答える清田は、中学三年生だった。

「でも志望校選ぶのって、将来を選ぶのみたいで嫌だな」

「まあ、そう考えるなよ、どの道行こうがその人なりになるものさ」

頭が良かった清田は、何処の高校へでも行けるんだからいいよな、と俺は言ったんだ。

「でも、こうして大人になっても普通に会えるんだから、人のする事なんてそんなに大差がないのかもよ」

ああ、本当だ。目の前で同窓会の世話をする清田と一緒に、二十年振りに同じ場所にいる。お互い生活は違うけど、一緒にいる事は普通だ。中学の時、清田が言いたかった事が今、分かったような気がした。

さて、こいつだ。どうしようか。あの時にもし戻ったら、今なら堂々と行ってやれる。中学三年のある日、盗難事件が起こった。女子の体育服が無くなったのだ。そしてそれが何故か俺のロッカーから見つかった。もちろん俺はやってはいないし、その時その女子には関心が無かったから、と言うかその女子は奈緒美なんだけど。とにかく犯人は前川なんだ。

俺はそれを証明したかったんだけど、なんか半分決着がついて、半分疑われたまま終わって行ったんだよな。でも里村奈緒美の体育服を盗んでいないのを証明してくれたのは、里村奈緒美本人だった。それも事件から五年後に。

事件の発端は、里村の体育服の盗難だった。そして俺のロッカーから女子の体育服が出てきたものだから、俺が疑われたのだ。しかし他にも同じような盗難があって、前川が現行犯で捕まった。そして何人かの女子の私物が出てきて、返品されたのだが、里村奈緒美の体育服は出てこ

なかった。俺のロッカーから出てきたものは他のクラスの女子の物だった。

結局里村の体育服は行方不明と言う事になったのだけど、本当の犯人は前川なのか、俺なのか見る人によっては違う結末となった。

それがなぜ五年後に、身の潔白を証明されたかと言うと、奈緒美本人から聞いたからだ。本当は盗まれてはいなかったのだ。奈緒美はその時ちょうど生理が始まったらしく、体育服に血が付いたそうだ。それで授業に出るのが嫌で、無くなったと言ったのが女子の間で瞬く間に広がり、事件として取り上げられたのが真相のようだ。

俺は自分のロッカーに女子の体育服が入っているなんて知らないから、ロッカーを開いた。知らない服を出してみると女子の物だった。周りで騒いでいた女子に取り囲まれ、犯人扱いされた。俺のロッカーと前川のロッカーは隣だったから、たぶん入れ間違えたんだと思う。実際に何度か前川の私物が入っていた事がある。でも一部の女子は、俺の事を容疑者みたいに思っていたんだと思う。まあ、忘れてしまったけど。でも今の俺なら、無実を証明できる。だって奈緒美は俺の妻ですから。もしあの忌まわしい日々を無くすことができるのなら、あの場所で潔白を証明したい。どうする。今さらでもあったけど、話してみるか。目の前にいた前川に話しかけた。

「久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだ」

あれから二十年か。その顔の曇りが、まだあの事件を引きずっている事を窺わせる。

「お前だろう」

その口調は強くその事を指した。目の前には中学生の前川がいる。

「違うって、お前のロッカーから出てきたじゃないか」

そうそう、この時はずっとこんな事を言っていたんだ。そして俺も知らないと言うより他に手はなかった。でも今は違う。俺のロッカーに入っていたブルマは誰の物かも知っているし、前川が他に何を盗んだかも知っている。

「なあ前川、お前に変な趣味があってもいいけどさ、他人のせいにするのは良くないぜ」

何もかも知っている俺は強気だ。

「...変な事言うなよ」

「でも、あれ里村のじゃないだろう」

「...知らねえよ、吉岡が盗ったんだろう」

だからさ、盗ってねえつうの。大体そんな物、奈緒美の下着なんか家にいっぱいあるし。そこへ加藤が割り込んできた。

「おい、吉岡。里村に謝れ」

当時、体の大きさでは加藤には敵わなかった。大きな加藤が強い口調で俺に言い寄る。そう言えば結婚してから奈緒美に聞いた事がある。加藤が奈緒美の事を好きだったって。でも付き合いはなかった。その事を知っている俺は、目の前で凄んで見せる加藤が怖くなかった。お前の片思いしている奈緒美は俺の妻ですから。体格では敵わないが、精神的に上位に立っている俺は言い聞かせようとした。

「まあ、待てよ。俺じゃないんだ」

「何言っているんだ。証拠もあんだろうが」

ありゃー、こりゃ盲目だね。奈緒美に惚れこんでいるのは分かるけど、良く現状を見ろってんだ。俺は、一呼吸おいて落ち着いた口調で言った。

「実はさ、前川が違うところから持ってきたんだ」

「んなことあ〜知るか。人のせいにしてんじゃねえぞ」

力任せに加藤に殴られた。ひ弱い中学生の体はいつも簡単にぶっ倒れた。

「今すぐに謝ってこい！」

加藤の大きな声に、何人が集まってきて、その中に奈緒美もいた。中学生の奈緒美に言っても、俺の味方はしてはくれないだろうが、何処か期待の目で奈緒美の姿を見た。

「加藤君もうやめて」

奈緒美が止めに入った。おっ、いいタイミングじゃないか。もしかして期待してもいいのか。

「ありがとう。もういいから」

奈緒美は加藤の握りこぶしにそっと手を添え、その場を去った。えっ、なんか変じゃねえの？集まった皆の視線が痛いくらいに刺さる。前川の奴は上手く脇に逸れて、俺はすっかり犯罪者扱いだった。

「違う、俺じゃないって」

いくら取繕ってみても、加藤の鉄拳に倒れている姿は、罰を受けた悪者に見えるのだろう。中学三年の同級生は冷やかな視線で俺を見ていた。

「ちょっと待てよ、ガキども」

「あんたもガキじゃん」

一人の女子が吐き捨てるように言い放つと、皆散って行った。なんか違うぞ、これはまずいんじゃないか。鏡に映る自分の姿を見てみると、背の低い中学のガキだった。

そのまま一日が過ぎた。もうどうすれば同窓会の会場に戻れるのか分からなくなった。こっちの世界？にも、ちゃんと両親がいて食卓を囲む。冷蔵庫を開けると、親父のビールが入っていた。思わず手を掛けそうになったけど、待て俺は中学生だと思いとどまり、一緒にいる若い両親に遠慮した。

三日が過ぎた。何時までここにいるんだ。不安なのか、精神が安定していないのか。何に気を入れていいのかわからない。黒板を見ながら事業を受けたふりをし、ガキどものつまらない話に相槌を打ったり、屋上から流れる雲を見て自分が誰かわからなくなった。

教師 t に戻ると、何かムードが違った。加藤が告ったのに里村が応えたそう。何か上手くまとまっちゃって、二人は楽しそうだった。奈緒美は俺の妻だつうの。そう思って見ても、中学の奈緒美には通じない。だってこの頃はお互いに何も感じてはいなかったのだから。

奈緒美の記憶 4

どうしよう。なんでこんな事になっちゃってんの。なんで私が加藤君と結婚しているのよ。そう、浩介は何処にいるのだろう。辺りを見渡してみても姿が見えない。もう、こんな時にトイレにでも行っているのかな。そう、携帯。携帯を開き電話をしようとしたが、アドレスに浩介

が無い。旦那と書かれた番号は知らない番号だった。あてにならない携帯をバックに放り込んで、そこにいた清田に聞いた。

「ねえ、吉岡浩介見なかった」

清田に声をかけると、中学の教室にいて、朝の授業が始まる前だった。清田はクラス委員として、皆

の出席を取っていた。

「里村さん」

「...はい」

返事をした時に隣にいる人に気付いた。えっ、加藤君。なんで、それに何よこの手。馴れ馴れしく加藤君の手は私の肩に掛けられていた。戸惑いながらも教室を見渡すと浩介がいた。一人こじんまりと小さく座っていた。もう何やってんの、助けてよ。心の中で思ってはみても、体は動かない。まだ成虫に成りきれていない芋虫の浩介に期待できそうもなかった。そこへ三井さんが来た。

「奈緒美なら上手くやっていけると思う」

あり得ない言葉を残し、自分の席へと歩いて行った。ちょっと待ってこの状況。もしかして私、加藤君と付き合ってるの。そう言えば同窓会の席で加藤君の妻になっていたっけ。まさかこのまま、そうなの？ちょっと浩介、助けてよ。そこで清田に声をかけられた。

「里村さん席について」

私はこの一言で同窓会の会場に戻された。でも、ここでは相変わらず加藤君の妻のようだ。向こうで、たぶん夫の加藤君が手招きしている。とりあえず呼ばれるままに足を運んだ。どうやって解決していいものか考えながら話の輪に入った。

「お前ら長いよな」

「もう腐れ縁だよ。二十年だぜ」

何が二十年よ、一日だって一緒にいた事ないくせに。でも、そうやって見ると加藤君、なかなかいい男前だった。何か久々に浩介以外の男を見たような気がした。

「そうそう、あの時だろう」

「なあ、奈緒美の体育服盗られたんだよな」

あー、あの話か。確か前川が犯人だったんだ。

「吉岡も中学生で趣味悪いよな」

あれは浩介じゃ無かったじゃない。大体私は盗まれて無いし。

「でも、俺達あれがきっかけで付き合ったんだよな。吉岡のお陰かな、なあ奈緒美」

気安く呼ぶなうの。何がきっかけだって？なんで浩介なのよ。

「あー、あの加藤君...」

「ぷっ、何、なんだよ加藤君って？」

いや、だって、あんたの事それ以外で呼んだ事ないし、名字しか知らないうの。

その後も加藤君は当たり前のように私を妻として扱った。さっきまで浩介と結婚したのかと驚いていた人も、何時の間にか加藤君にすり替えられていた。何か過ちを犯した？中学の時に？そうだあの日の朝、くみちゃんに生理になったって相談していたんだ。くみちゃんに話しかければ、あの時に戻れるかもしれない。

私はくみちゃんを捜して話しかけようとしたけど、生憎くみちゃんは出席してはいなかった。

もう、どうしたらいいの。そうか、私だ。私が言わなければいいのよ。えーと、最初に言ったのは誰だっけ。ん～、近藤さん、いや違うかな、木村さん、たぶんどっちかだと思うんだけど。

曖昧な記憶を思い浮かべて二人を捜す。近藤さんは出席してはいなかった。じゃあと、木村さんに話しかけた。

「あのさー、三年生の時だけど」

体育の授業前の女子更衣室にいた。ここで私は皆にばれないように無くしたふりをしたんだ。そしたら何故か盗難事件になっちゃったんだよね。

「あー、木村さん。私さー生理になっちゃったみたいなの。今日の体育に出ないから、先生に言ってくるね」

よし、本当の事を言ったぞ。これであの事件は起きないはずだ。私は先生に事の事情を告げて、見学になった。皆の待つ体育館に入ると、そこは同窓会の会場だった。恐る恐る訊いてみた。

「ねえ、加藤君何処にいる？」

「えー、今日来ていないんじゃない」

変化はあったようだ。どうやら加藤君の妻ではなくなっただけらしい。ではと、浩介を捜すが見当たらない。浩介と仲の良かった男子に訊いてみる。

「吉岡浩介、見なかった」

最初見かけたきりで、見ていないという。何処かにいる事だけは確かなようだ。

エピローグ

「里村さん」

声の方に振り向くと、浩介が立っていた。何をとぼけた事を言っているのを見ると、朝着ていた服と違う。とりあえず恐る恐る話を訊いた。

「誰と来たの？」

「誰って、一人だよ」

「結婚は？」

「いや、まだ独身なんだ」

「もしかしてサーフィンなんかやっている？」

「えっ、分かる。日焼けしてっからな」

私の知っている浩介の事を幾つか質問した。

「なんで、そんな事を知っているの？」

だって十七年も一緒にいるんだよ。あんたのパンツの中身の事も言ってやろうか。

「ねえ、覚えてる。私の体育の服が無くなった事件」

「えー、何の事だっけ？」

どうやらこの事件は無くなったようだ。普通にその辺にあったものを口に放り込む浩介は、私の浩介ではなかった。そんな時、中学三年の資料が回ってきた。ホームルームで使われた資料や、プリントなんかを日付別にして全部綴じてある。順にめくって行くと、その日の当番の名前と

話の要点が書かれてあった。これは、十年前に亡くなった担任の先生が、毎年受け持った生徒のために綴じていてくれたもの

だった。清田が先生の葬儀の際に、奥さんから貰ってきたのだと言う。

パラパラとめくって行くと、その日を見つけた。それは浩介と当番になった日だ。この日の資料もきちんと綴じてあった。当番のところに吉岡浩介、里村奈緒美と書かれてある。三枚目の資料を見たとき、これが無くてチャイムに間に合わなかった光景が鮮明に脳裏に浮かんだ。私はビールを飲んでいる浩介を捕まえて、それを見せた。

「これ覚えてる？」

私達は廊下を歩いていた。黙々と何も話さず、歩いていた。これから職員室へ、資料を取りに行くところだ。浩介は私より一歩下がったところを歩いてついてくる。後ろを見なくても、どんな顔をしているのか分かる。話しかけようか、どうしようかと迷っているうちに職員室に着いた。

「失礼しまーす」

私に遅れて浩介はぼそつと言った。もう、しっかりしなよ。心の中でエールを送る。横に並んだ浩介は私と背丈が変わらない。何か弟のような気がしてきた。でも、未来の旦那様なんだよね。今の浩介からは、あのサーフィンをしている逞しい浩介を想像する事が出来ない。まあ、私は知っているから、別にそれはそれでいいんだけど。先生に吉岡はこれ、里村はこれと、資料を見せられる。その時私は、はっとした。

無いはずのプリントが机の上にあったからだ。これが無いために私たちは慌てたんだから。私は浩介の足を強く踏んだ。

「痛っ」

声を出す浩介に先生が気を取られているうちに、プリントを机の間に落とした。

「あれー、無いな」

先生はプリントを見つけられず、机の上やら抽斗やらを探し始めた。そうしているうちにチャイムが鳴った。

「先生、そこに落ちてます」

しらじらしくも、私は指さした。じゃあこれもと、浩介に持たされた。私達は一礼して職員室を出た。

「早く行こう」

私は浩介を慌てさせた。速足で歩き、階段を上がる。そうここだ、この踊り場で浩介が転んだんだ。

あれ、浩介の奴転ばないじゃない。これはまずいと、次の階段は走って駆け上がった。案の定、浩介は見事なまでにぶちまけてくれた。

二人でしゃがんで一枚ずつ拾い集める。私は心臓の鼓動が大きくなるのが分かった。だってこの後キスするんだもん。知らずにハプニングで起きた事なのに、私は分かっている。一枚また一枚と浩介に近づく。浩介は拾い集めるのに夢中で、私の存在には気付いてはいない。この紙だ、私は手を伸ばした。浩介が視界に入る。心臓が音を立てて高鳴る。

ん、浩介の唇は私の口に捕えられた。好きの気持ちを込めて、まだ大きくない浩介にキスをした。ぱっと離れた瞬間、私達は同窓会の会場にいた。

「思い出した？」

「ああ、思い出した。このプリントだよな」

そこからは、普通に帰った。後は何もなかったように同窓会は過ぎ、結構酔っぱらって二人でタクシーで帰った。

「あの子たち、明日迎えに行かなきゃね」

タクシーの窓から流れる風景に、たわいもない会話が当たり前の普遍的な日常を思わせる。不思議な体験は忘れたかのように、その日は終わって行った。そして週末になった。

「おーい、みんな行くぞ」

珍しく、朝から浩介が張り切っている。

「何張り切ってるの？」

「何って、サーフィンに決まっているだろう」

あー、久々に遊びに行くのかと浩介を見ていたら、娘がさっさとサーフィンボードを抱えて浩介の車に乗せている。え、なんで娘たちが？そう思っていたら、車の窓から娘が叫んだ。

「はやくう〜」

娘が何もしない私を急かす。

「早く準備しろよ」

浩介が車のところで催促するように私に言っている。

「もう、お母さんのボード積んであるからね」

娘の声に車のところへ行ってみると、浩介の車に四人分のサーフィンボードが積んであった。

「今日の波は二人で乗れるかな〜」

浩介も楽しそうだった。私はなんとなく皆の動きにつられて車に乗った。車の中では娘がいろいろサーフィンの事を言っている。

あんた達、やった事なんてないでしょう。不思議に思って聞いていたが、話の内容はしっかりしたもので、知らない様子ではなかった。

「お母さん、今日は成功させようね」

何の事だろうと思って訊いてみると、

「だから、お父さんと二人で乗るって言ってたじゃん」

あの若かりし日々が思い出される。車の窓から磯の香りが入ってくると、サーフィンと浩介、太陽の日差しが昨日のように思う。

「さー、着いたぞ」

娘達の手際の良さには驚かされた。自分の準備をさっさと済ませると

「お父さん、行っていい？」

「ああ、気をつけてな」

浩介の声を聞き終わったかと思うと、娘二人は海に向かってパドリングを始めた。現状が飲み込めずにいると、浩介が行こうと誘ってきた。

「だって、十年はやってないじゃない」

「はあ、先週も来てたでしょ、変なこと言ってないで行くよ」

私は浩介の言うままに海に入った。不思議と体はすぐに順応した。まるでずっとやっていたみたいだ。

「次、乗ろうか」

浩介の合図で私は立った。波の上に浩介と同じ波に立っている。波のチューブが足元で生き物に姿を変え、私達を海上の空へと解き放つ。この感触、まぎれもない浩介の感触だ。

砂浜へ戻ると満面の笑みの浩介がいた。私も満面の笑みのだろう。高く上げた手でハイタッチすると、娘たちが凄いを連発して、目を丸くしていた。

「私も、お母さんみたいになりたいな〜」

娘の素直な感想に、ちょっと自慢してもいいかな。二人で砂浜に座り込んで、娘が練習しているのを見ていたら、子育てに追われ忘れていた自分の時間を思い出した。砂の感触に私の記憶が蘇る。海とサーフィンと浩介、それは今も続いている。揺れる陽炎に海と空の青さが溶けているのを眺めていたら、浩介が言った。

「覚えているよ」

「えっ」

「ファーストキス」

本当は、階段一つ違っていたけども、何か好い感じみたい。

「わざとだと思う？」

「えっ、そうなの？」

「どうかな〜」

中学の時の私達は、あまりかかわり合いがなかった。同級生だと言うだけで、実はよく知らなかった。中学で同級生の私達は、中学の同じ思い出を、今砂浜の上で見つけた。

〈了〉